

リベラリズムと帝国主義

少年冒険物語『ピーター・パン』の（不）可能性

高田英和

1

マーティン・グリーンの『ロビンソン・クルーソー物語』は、ダニエル・デフォアの『ロビンソン・クルーソー』を雛形とする物語、ロビンソネイドの系譜を明らかにしている。この物語形式がイギリス帝国及びヨーロッパで綿々と続き、ポピュラーであり続けたのは、少年の成長の物語が同時代の帝国主義における理想的な男性主体のあり方を提示し、伝播する役割を負っていたからだとしてグリーンは述べている(159)。そのなかでグリーンはJ・M・バリの『ピーター・パン』をロビンソネイドの極点と位置づけている(154)。この作品が示す変化、つまり、主人公の少年、ピーター・パンの成長が疑問視され、舞台が想

像上の島、ネヴァーランドに設定されることは、帝国主義の教具としてのロビンソネイドがその伝統的な役割を果たしえなくなったことを示しているのだと。要するに、『ピーター・パン』においてロビンソネイドは終焉し、ファンタジーになったのである①。グリーンの手組みを、別の言葉で説明しているのが、ケリー・ボイドの『英国における男らしさと少年物語誌』である。ボイドは、一八八〇年から一九二〇年までの少年雑誌において、それまで大いに評判の高かった帝国冒険物語が国内冒険物語に人気を奪われたこと、そしてその主人公の人物像が貴族的なものから庶民的なものへと変化したことを指摘している(70-73)。

本稿は、ボイドの論考を補助線にして、『ピーター・パン』

がイギリス国内と連続的であることを確認しながら、エドワード朝期におけるロビンソネイドの変容を考察する。その際、筆者は、以下の三点、(1) 帝国主義批判の議論の登場のなかで、英国のリベラリズムが自由放任主義からニューリベラリズムへと転換すること、(2) いわゆるメインストリームの小説において、リアリズムが終わり、モダニズムが新たな価値として台頭すること、(3) フレドリック・ジェイムソンがモダニズムの誕生を帝国主義と関連づけたこと、を踏まえ、グリーンが『ピーター・パン』について指摘するロビンソネイドの不可能性を、帝国主義の終焉ではなく変容として読み解く道を考えた。言い換えれば、それは、グリーンがロビンソネイドの終焉、不可能性として位置づけようとした想像上にしか登場しない「島」が、ジェイムソンが論じた新たな帝国主義文学としてのモダニズム文学における植民地の不可視化、すなわちイギリス帝国主義の構造的な変容——植民地主義的から金融資本主義的への転回——とどのように関係しているのかということの考察となる。また、上記の問題は、本稿では、間接的・補足的にはあるが、ディズニー版の『ピーター・パン』をも通して考察される。つまり、五〇年代アメリカにおけるリベラリズムと帝国主義の共犯関係——この時期如何にリベラリズムの名のもとに帝国主義が隠蔽されていたのか——を概観することによって、

『ピーター・パン』はこのような状況（それは現在へと続いていく）の系譜の出発点にあることが示されるであろう。

2

世紀末を境にして帝国冒険物語が国内冒険物語へ、その主要なキャラクターが庶民的な人物へと変化したというポイドの指摘は、『ピーター・パン』における少年たちの行動／生活様式にもその例を見ることがができる。『ピーター・パン』には、少年たちがフットボール、すなわちサッカーに関わっている姿が、度々見受けられる。ウエンディの弟で、ダーリング家の長男ジョンは、「ジョンのフットボールがある日には」(21)とあるように、ロンドンのとあるサッカークラブに通っている²⁰。ネヴァーランドでは、多くの人魚たちが、虹の水からできた水玉をボールの代わりにして、それを尻尾で打っては、虹から外に飛び出さないようにして遊んでいる。ゴールは虹の両端にあって、ゴール・キーパーだけは手を使うことが許されている。「子どもたちが仲間に入ろうとすると、彼らは自分たちだけで遊ばなければなりませんでした。というのも、人魚たちがすぐに姿を消してしまったからです。(……)ジョンは、水玉を、手ではなく頭で打ち返すという新しいやり方をしてみせました」

(141)と、ジョンとその弟であるマイケルは、孤児たちのロスト・ボーイズ(トゥートルズ、ニブズ、スライトリ、カーリー、双子たち)と、サッカーとらしいゲームに興じている。そして、物語のはじめの場面において「ピーターは立ち上がるなり、ジョンを毛布ごとベッドから蹴落としてしまいました、ひと蹴りにです」(96)と、まだ面識のない、寝ているジョンをいきなり蹴飛ばす、ロスト・ボーイズのリーダーで、物語の主人公であるピーター・パンは、また、ライバルでパブリック・スクール出身のキャプテン・フックを、キックで、海へと蹴落とし、彼との戦いに終止符を打つ。「フックは船べりに立って、空中をすべるようにやってくるピーターを肩ごしに眺めながら、足で蹴ってくれ、という身振りをして見せました。そこで、ピーターは、剣で突き刺すのをやめて、足で蹴りました」(204)。このように、ボイドが述べるこの時期の少年を中心とする物語において「ヒーロー」が「貴族的から庶民的へ」と変化し(72)、「下層階級の少年たち」が「フットボール」に熱中し(76-77)、「帝国冒険物語が廃れ、冒険はロンドンの街中に設定された」(73)と「こうことは、『ピーター・パン』にも当てはまらう。少年たちがロンドンとネヴァーランドにおいてサッカーをしているのは、そこが英国国内と連続的であることを示している。それは、つまり、ネヴァーランドが、植民地の問題だけで

はなくて本国の問題も包含していることを、本国という側面もあることを示唆している。ネヴァーランド、それは、ボア戦争を契機に「少年非行の増加」が不安視されると同時に「少年は国家の希望」とも化した場所(ボイド72)——そこは後にT・S・エリオットが「今、無時間と時間との交差の点は英国にあり、しかもどこにもない。決して、常に」(76)と記すこととなる他の何処にも決して二つと存在しない島——すなわち英国をも表しているのだ。

上記の少年たちの振る舞いについては、エイレン・シッソンがロスト・ボーイズを少年フリーガンと関係づけていること(121-22)、ジャック・ザイプスが「ピーターは「……」社会の大人たちに対する反抗者である」と述べていること(176)が重要であるだろう。確かに、親がいなく、学校にも行かずに、ただ遊んでばかりで、一八八八年のサッカーリーグの開始以降下層階級の象徴と化したサッカーと思しいスポーツに興じている彼らを少年フリーガンと捉えることは、的を射た指摘であろう。現に、たとえば、一八九八年八月の『デイリー・グラフィック』、『サン』などの紙面には、あたかも上述のピーターの行動を活写しているかのよう、「彼らは人でフットボールをした」、「フットボールのように人を蹴った」というような見出しが溢れていた(Pearson 76-77)。当時の英国において、少年フ

リーガンは社会問題化していたのだ。

この問題の解決に力を注いだのが、ポリア戦争のヒーローで、ポリースカウトを創設したロバート・ベイデン＝パウエルである。彼は一九〇八年に『スカウティング・フォー・ボーイズ』を出版している。ポリースカウトのマニフェストともいえるべきこの本の副題は「良い市民性を教えるための手引書」となっており、どのような意識からこの団体が創設されようとしたのかを端的に示している。ベイデン＝パウエルの『スカウティング・フォー・ボーイズ』には「現在、英国には二〇〇万人の少年があり、そのなかの二五万人から五〇万人は学校外でも良い影響下にある。(……)残りの者たちは「フリーガニズム」の波に吞まれようとしている」(200)と、つまりここには、イギリス帝国の衰退を目の当たりにしていた二〇世紀初頭の英国の人々が抱いていた社会の不安や焦りが、少年フリーガン問題というかたちで現れているのだ²⁾。ポリースカウトは一般に帝国主義の教具と言われており³⁾、その目的は帝国主義／植民地主義の流布にあるが、そのために子どもをちゃんと育てようという視点は、実は国内不安から生じたものである。

少年フリーガン問題、すなわち国家の未来を担う子どもの育成という教育問題は、二〇世紀初頭の英国の言説において、重要な事案だったと考えて良いだろう。上述したように、『ピー

ター・パン』の少年たちは反社会的で、社会の不適者と思しい人物たちではあるが、しかし彼らは最終的にきちんとした職業——運輸業、法律業、また金融業と思しきもの——に就く。しかも、彼らが就職するのは、英国の国内においてである。では、なぜ、彼らは更生し、そこで職を得るのであるうか。ポイドが述べた「英国国内の問題」を、当時の帝国が置かれたコンテクストに則して考えてみたい。ポリア戦争の英雄が定めたポリースカウト設立の精神は、帝国主義的なものであるが、同時に、国内の不安、そして、国内の帝国主義批判の新しいレパリズム言説にも対応している。それは、想像上のものとなってしまった植民地ネヴァーランドが、実はイギリスの国内問題も反映しているという複雑な入れ子構造と同じ布置のなかにある。国内問題がメビウスの輪のように国外問題とつながる(もしくはその逆)という事態が、ジェイムソンの言う(ハイ)モダニズム誕生期としてのエドワード朝期の文化言説の特徴なのである。

3

イギリス帝国は衰退の危機に直面していたというのが、エドワード朝期の流行の言説であり、広く問題化された認識であった。それには、アメリカの躍進が大いに関係していた。ジョヴ

アンニ・アリギが『長い二〇世紀』で述べているように、実際のところ二〇世紀は、帝國的な覇権について、アメリカの時代となっていくことになる。このことはまた、新たな植民地の不在という問題と関係がある。ジョン・ペラミー・フォスターの述べるように、一九世紀の最後の四半世紀において西欧帝国主義諸国による植民地の併合は頂点に達した(101)。それは、未開の土地が地球上に存在しなくなったことを意味しているが、言い換えれば、一九世紀のイギリス帝国を支えていた植民地主義的な帝国主義がその頂点を迎えたことでもある。現在のわれわれから見れば、二〇世紀の帝国主義は、アメリカ中心の金融資本主義型の帝国主義を主流としていくことになるわけだが、この時点——冷戦期以前——においては、イギリス帝国主義に對するアメリカの脅威として認識されたのである。このような状況と連関して、『ピーター・パン』において、ネヴァーランドは想像上のものとなり、(以下で検証するように)少年たちは将来英国国内で働くこととなる。だが、これらを、植民地主義の終焉(の兆し)の言説からのみでは十分に理解することはできない。むしろ、植民地主義の終焉が、英国国内においてどのような政治的な布置から言挙げされていたのかを考える必要がある。それは、新たな自由主義言説の台頭、すなわち當時勃興したニューリベラリズムによる帝国主義批判という文脈

から理解される。エドワード朝を代表する経済学者のJ・A・ホブソンは、『リベラリズムの危機』で、放任主義の「レッセフェールリベラリズム」から国家主導による社会改革に重点を置く「ニューリベラリズム」への転換の重要性を述べている(8)。ロナルド・ハイアムは、帝国は現実的には一九三一年に新たな連邦制、福祉国家へと転換することになるが、一九〇七年に開かれた帝国会議が実はそのターニング・ポイントであったと指摘している(545)。

このように帝国の衰退という危機下にあった英国では、一九〇六年に総選挙が行われ、政権はアーサー・バルフォアを筆頭とする保守党からH・H・アスキス、デイヴィッド・ロイド・ジョージ、ウィンストン・チャーチルを擁する自由党へと移ることになった。ここで重要なのは、与党の座に返り咲いた自由党が、ニューリベラリズム的政策によって帝国の危機的状況を打ち破ろうとしていたという点であり、それが一つのかたちとして良く現れているのが、一九一〇年の密かに保守党との連立政権樹立に向けた動きであろう(Semmel, Searle)。これは、同意間近までいきながらも、結局、両党の政策の違いにより合意には至らなかった。この連立構想を含むその会合のあらましについては、たとえば、『クマのプーさん』を書き有名になるA・A・ミルンが、当時、A・A・Mというイニシャルで

『パンチ』に「カンファレンスの秘密史」（一九一〇年一月一日）という題で書いている。自由党の試みとそれに対する保守党の態度をも含めて、これは世間を騒がす出来事であった。自由党がそこで重視していたことのひとつが、教育問題である。

この会を司ったのはロイド・ジョージで、そのときの彼のメモのなかの「国家の再編」の部分に、そのことが記されている（Grigg, 365）⁶⁵。進歩主義的な思想であるニューリベラリズムの考えを取り入れて、「国家的効率」の名のもとに、あらゆる分野で効率を推し進めようとした自由党の姿勢が、ここに垣間見られるのは、何も不思議ではないが、帝国の衰退の危機に対して党派を超えて取り組もうとしたときに、教育問題にまで踏み込んだその意義を見落としてはならない。また興味深いのは、一九〇五年に『イギリス帝国衰亡史』を書いた一般に保守派と言われるヴィヴィアン・グレイ（本名エリオット・E・ミルズ）が翌年に副題を「彼らは共に教育を受けるべきであるのか？」とする『少年と少女』（エドワード・S・タイラーなる人物との共著）を書き、そこで既に階級差を越えた共学の意義について述べていることだ。そして、この本の紹介が『イギリス帝国衰亡史』の裏表紙にてされていることもまた注目に値しよう。要するに、この時代においては政治的立場の違いにかかわらず、政府の介入による社会政策を重視するニューリベラ

リズム的思想は浸透していたのであり、それゆえ、英国内において次世代の育成が、帝国の衰微とフリーガン問題とも相まって、重要な関心事で有り得たのである。

以上のことから、『ビーター・パン』における少年たちの育成、すなわち教育という問題は、ベイデン・パウエルが『スカウティング・フォー・ボーイズ』においてフリーガン問題に取り組んだのを含め、帝国の斜陽期における本国、英国の社会全体の退化言説と、その弱体化した英国の効率的な再建のためにニューリベラリズムという考えが重要視されたのと密接な関係にあることがわかっていく。現状を打破する最良の方法の一つが将来の国家を支える子どもたちの育成であったということ、つまり教育による国力強化が目指されたのである。ゆえに、効率化という名のもとに、この時期の少年たちは、ヴィクトリア朝期のパブリック・スクールにおいて重視された身体運動としてのラグビーではなく、また一八七〇年に始まった初頭教育において推奨された *gym*（読み、書き、算数）という詰め込み方式でもなく、彼らにとって馴染みのあるスポーツ、サッカーを通して、自発的に身体と精神を鍛えるように、働きかけられていたのである⁶⁶。だからこそ、『ビーター・パン』の少年たちはサッカーをするのだ。また、少年フリーガンの問題点は、サッカーの観戦に重きが置かれていて、彼らが実際にボールを蹴らないこ

とにあると考えたベイデン＝パウエルは(277:297)、サッカーをプレーすることで身体と精神の鍛錬は可能であると考えたのであろう(297)。それは、つまり、教育の仕方の強化、寛容であり、彼らの身体が国家によって強固に管理、監督の対象となったことを物語っている。

現に、英国国内と連続的なネヴァーランドで海賊と戦う以外、これと言って他に何もせず、ただ遊んでばかりいるだけの少年たちではあるが、彼らはサッカーによって健全なる精神を健康なる身体に宿すことに成功している。それは、最終的に、彼らが英国の中心地、ロンドンで職を得る、つまり国内で就職する点に表れている。しかし、彼らが教育されると言っても、それはエドワード朝的であるということが重要である。それは、R・M・バラントインの一九五七年出版の『さんご島』に登場する、良家の出身と思しい、やがては兵士や宣教師または植民地執政官などを夢見るであろう三人の少年たちや、同年に出版されたトマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』のトムの親友でパブリック・スクールの卒業後に軍隊に入隊しインドへと赴くハリー・イーストやそれを羨むトムとは、異なる道程を『ピーター・パン』の少年たちが歩んでいることにある。つまり、彼らにはヴィクトリア朝期において規範化されていた身体的、精神的成長概念が内面化されていないのだ。それは、

植民地主義の終焉という言葉の布置のなかで、以前のように彼らが国外に希望を抱くことなど、ほぼ不可能に等しかったのであると同時に、これはまたニューリベラリズムの誕生と相重なり、植民地主義的な帝国主義がナショナリズムに変容するという問題でもあったのだ。それゆえ、ネヴァーランドは英国としても表象されえる。別言すれば、これは、帝国の衰退からの英国ナショナリズムの萌芽、再編という言葉と関連して、彼らは、ポイドが述べる「都会に舞台を設定された国内冒険物語」における「ヒーロー」としての下層階級の若者たち」さながら、「(「)」、国内を散策しつつ、サッカーという遊びに興じながら、心身を鍛えて、そこに潜む侵略者と思しき海賊を排除するということでもある。要するに、ここでのポイントは(以下のジェイムソンの論考のところで議論するが)、『ピーター・パン』が示しているのは、単に帝国の表象不可能性ではなくて、植民地と本国が繋がっていることの表象不可能性だということにある。上述したように、一九世紀型帝国主義の終焉と二〇世紀型ナショナリズムの出現に関連して、少年たちは、英国はロンドン、すなわち国内で職を得ることになる。

双子たちやニプスやカーリーが、会社に通うところはいつでも見られます。小さなカバンと傘を持って出かけて行くので

す。マイケルは機関車の運転手になっています。スライトリは身分の高い女性と結婚しました、ですから、貴族になったのです。かつらをかぶった裁判官が鉄の扉から出てくるのが見えるでしょう？ あれは、むかしのトゥートルズです。

(220)

彼らの就職先が、鉱業や製造業ではなく運送業、法曹界、また金融機関と思しきところであるのは重要である。と言うのは、これが帝国主義の転回と関連しているからだ。たとえば、先程言及したホブソンは、『帝国主義論』において、一九世紀末から二〇世紀はじめにかけて台頭した新しい帝国主義とは集中した経済的、金融的利害の支配の結果であり、その主たる担い手は金融業者や投資家／資本家であると述べている(82)。これは、つまり、イシュトヴァン・メーサロシュが指摘しているように、この新しい帝国主義は、V・I・レーニンが『帝国主義論』において示した「資本主義の最高段階」としての帝国主義もしくはそれに近似したものとして、金融を中心に行っていること、独占資本と結びついていることに特徴がある(50)。そして、その帝国主義は、この時期に台頭したニューリベリズムと親和的であり(ニューリベリズムから発達した二〇世紀の福祉国家的な制度が、基本的に、現在ではグローバリズムと呼

ばれる二〇世紀の帝国主義と共生して生き延びたことが示すように)、むしろ、旧来の植民地主義的帝国主義から新しい金融資本型の帝国主義への移行は、国内のニューリベリズム的な改革と同時進行するかたちで発展していった。彼らが国外ではなく国内で就職する姿は、実に当時の帝国主義の転換と一致する。それは、ハリー・マグドフが端的に述べているように、一九世紀の植民地主義的な帝国主義とは異なり、旧来の帝国／植民地主義へのニューリベリズムによる批判を通じて出現した新しい金融資本主義的な帝国主義のなせる業である(99-100)。この帝国主義は、ロンドン／シティを中心に行っているものである。ゆえに、彼らは、たとえば、彼らのリーダー、ピーターが表す永遠の少年性を体現しながら、ロンドン、シティで株の取引に励んでいるヴァージニア・ウルフの『歲月』に登場する植民地帰りの男、マーティン・パージターのように、軍人、宣教師、植民地執政官などを、もはや受け入れられないもの、つまり時代遅れなヴィクトリア朝的な生活概念に含まれるものとして認識しているのだ。彼らの内向化した生活様式は、ニューリベリズムの誕生によるヴィクトリア朝的拡張主義批判との深い繋がりの上に成立している。

ここで、ディズニー版『ピーター・パン』（一九五三）とアメリカとの関係を見ておきたい⁸⁾。アンドリュウ・J・ペースヴィッチの『アメリカ帝国』は、冷戦期アメリカの文化とは、封じ込めの文化であったばかりでなく、政治的とりわけ経済的自由の推進の文化であったと指摘している(140)。言い換えれば、それは、ソ連の共産主義すなわち全体主義の脅威に対して、アメリカは積極的に国内外での統治と覇権を遂行させることで対応しようとしたということになる。このような現象は、何も政治経済のレベルにおいてだけでなく、文学や映画のレベルにおいても同様に、見られたものである。モリス・ディクスタインが『神殿の豹たち』で述べているように、五〇年代アメリカにおいて、社会に対して反社会的で、個人主義的な反抗を称揚し、自由に振る舞う「少年または青年」を主人公にした作品が数多く生み出され、そして、それらはマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』（一八八四、以下『ハックルベリー・フィン』）を基にしていたという。J・D・サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』（一九五一）、ラルフ・エリソンの『見えない人間』（一九五二）、ソール・ペローの『オーギー・マーチの冒険』（一九五三）、ジャック・ケルアックの『路上』

（一九五七）、映画では、『乱暴者』（一九五三）、『理由なき反抗』（一九五五）で、マーロン・ブランド、ジェームズ・ディーンといったスターを輩出した(10-11)。また、三浦が『リベリズムの帝国』で論じているように、リチャード・ライトの『アウトサイダー』（一九五三）、ならびに『真昼の決闘』（一九五二）や『シェーン』（一九五三）といった西部劇映画も、上で列挙した作品と同類のものとして挙げられる(11-16)。すなわち、これら作品群のヒーローたちは、管理社会の否定を表している。そして、この流れのなかに、ウォルト・ディズニー製による『ピーター・パン』も含まれることになるだろう⁹⁾。

ディズニー版『ピーター・パン』を「冷戦期の自由をテーマにした映画」として考える際に、五〇年代アメリカ文化における、ソ連の共産主義すなわち全体主義はイデオロギーである、しかし、アメリカの自由主義はイデオロギーではない、要するに、アメリカはイデオロギー・フリーである、というテーゼが存在していたことは重要である(Bell)。ライオネル・トリリングは、『リベラルな想像力』（一九五〇）に所収の「アメリカの現実」において(9-23)、アメリカの国家の基となるその文化が三〇年代を境にして低俗化し、それがリベラルなアメリカであるとされ、本来のアメリカらしい自由さが疎外されているという危機感を示している。このような、ある種庶民に迎合し

て形成された、一律的なアメリカ文化は、ソ連の全体主義の文化と何ら変わらないのではないかと。そして、そのような状況を推し進めている、V・L・パリントンの『アメリカ思想主潮史』を取り上げて批判する。トリリングのパリントンを批判する際のポイントを端的に示せば、それは、パリントンの美学的感覚が疎いということにある（これはパリントンが現実主義者であるのと関連している）。このことは、パリントンの示す、複雑で個性的な芸術・文学作品を排除して形成されたアメリカ文化は、リベラルでも何でもない、とトリリングが指摘する姿勢に表れている。ここにトリリングの考えの重要さがある。それは、複雑で且つ個性的で尚その内に「矛盾」（肯定と否定を同時に許容するという言わば一枚岩的でない概念）をも含む芸術家・作家の作品こそが、アメリカ文化の本質、リベラルな要素を保持しているというものである。これは一九世紀の偉大な作家たちから綿々と続くアメリカ文化の伝統であると考えるトリリングにとって、たとえば、ヘンリー・ジェイムズを、ジェームズ・マクニール・ホイッスラーと同様に、現実逃避主義者として捉えることは、芸術的、美学的に正しくないという問題だけでなく、そのように捉えることは既にある限定的な思考を強要しているという問題であり、それはイデオロギーと何ら変わらないということであるのだ。要するに、トリリングは、

三〇年代から開始されたニューディール政策に表れる、全体化するアメリカ国家、それはイデオロギーが支配する国家であり、そのような概念を国家の概念として社会に根づかせているパリントンのテクストは、イデオロギーそのものであるとしている。セオドア・ドライサーの描くリアルな文学ではなく、ヘンリー・ジェイムズの記すモダンな文学を評価することは、リベリズムを推し進めるが、それはイデオロギーではないとトリリングは捉える。彼の考えるリベリズムは、イデオロギーがない社会でこそ可能となる。ここで重要なのは、つまりトリリングはリベラルな社会をアメリカの国内外に押し広めることを人道主義的、普遍主義的と考えているが、現在のわれわれの目にはそれは帝国主義的にしか見えないということにある。トリリングのテクストは帝国主義を不可視化させている¹⁰⁾。

他方、『イノセンスの終わり』（一九五五）のなかの『ハック・フィン』論で（725頁）、アメリカは少年性と密接に関連している、と指摘するレスリー・フィードラーは、アメリカの伝統と呼ばれえる偉大なる二つの文学作品は、トウエインの『ハック・フィン』とハーマン・メルヴィルの『白鯨』（一八五〇）という、子ども部屋や図書館の児童コーナーの本棚に置かれている児童書、より正確には、少年本であると述べている。また、トウエインとメルヴィルの二作品に限らず、アメリカ文

学史において、クーパー、デーナ、クレイン、ならびにヘミングウェイといった作家の作品も少年性を主要なテーマとして掲げており、これらの作品世界において、少年は怠惰且つ腕白な子として表れている。続けて、上述した作家の作品において更に共通点があるとすれば、それは、少年が異性愛ではなく同性愛を行うということにあり（このスペクタクルな事態がイノセンスであり、それがアメリカを表象することとなる）、例えば、「不可能な逃避」を描いている『ハック・フィン』におけるハックとジムの関係に、「不可能な探求」を記している『白鯨』のイシュメールとクイーケグの関係に、このことは表れていると言う。（イシュメールとクイーケグの関係は、ハックとジムのそれと同様に、イノセントで子どものような無知の上で成立している点が重要となる。）言い換えるならば、少年は、幼年期を脱しない、つまり、永遠の少年性を保持する、ということに、フィードラーの思考のポイントはある。要するに、フィードラーは、これらの作品において、少年性と同性愛の併存だけでなく、同時に、『ハック・フィン』の場合であるなら白人／ハックと黒人／ジムの「異人種間同性愛」の関係を見てとるのが重要であると述べている。ここでわれわれにとって重要であるのは、すなわち、フィードラーが、文学作品は、近代（核家族化された）アメリカ社会において禁止／抑圧された、

しかし前近代では許容されていた、二つの事柄である同性愛と異人種間親交を（無）意識的に異人種間同性愛という一つの事柄として結びつけ、それを原型／元型として心理学化し、そして、その担い手としての反社会的な少年（ハックのような「グッド・バッド・ボーイ」）を新たなアメリカの象徴として神話化させているということにあるだろう。そして、フィードラーもまた、人種間差異を消滅させることによって、人種概念ひいては帝国主義を不在化させていることを、われわれは見落としてはならない。上記のことを端的にまとめると、それは、先に挙げた「イデオロギー・フリー」という概念も含め、冷戦期において「ソ連」共産主義対（アメリカ）資本主義」という問題が「全体主義対リベラリズム」という問題に置換されると同時に「モダニズム」（「人道主義」「普遍主義」）が出現し、そして「帝国主義」の消滅／隠蔽がなされたということになるだろう。

五〇年代アメリカを代表する二人の文芸批評家、トリリングとフィードラーを頼りに、この時期のアメリカ文化を概観した後で、『ピーター・パン』を観ると、主人公ピーターの振る舞いは、驚くほどこの時代思潮に通底しているのがよくわかるであろう。それは、つまり、社会に反抗的な少年で、女性嫌悪を示すピーターが、ロスト・ボーイズを含む少年たちそしてなに

より異人種を彷彿とさせるフック船長との同性愛関係に浸り、終始自由気ままに行動する点にある。そして、そもそもピーター自身がロスト・ボーイで実際生存しているのかどうか判別つかない、基本個人行動を好む放浪癖のある孤児且つ永遠に少年という得体の知れない人物で、存在自体に矛盾をきたしているのだ。だがしかし、否、だからこそであろう、『ピーター・パン』はこの時期にアメリカで公開されたのである。あたかも五〇年代アメリカの行動原理に則して活動するピーター、その彼を主人公とする物語『ピーター・パン』、その公開の意義は、正しくリベラリズムの推進にあったのだ¹¹⁾。

5

ここで、再び英国の話に戻ろう。エリオットの『荒地』のように様々な作品の要素を組み合わせて構成される『スカウティング・フォー・ボーイズ』をモダニズム作品と捉え(Boehmer XXXV-XXXVI)¹²⁾、そこで示される少年期の重要性を考慮に入れつつ、当時のモダニズム文学(ウルフ、D・H・ロレンス)にも見られる『ピーター・パン』の少年たちの生の様式を、同時代の国家言説としての帝国の衰退と連続したものと考えるとき、ジェイムソンの論考「モダニズムと帝国主義」におけるモダニ

ズム文学の出現の原理もまた、新たな観点から読み直すことが可能になる。ジェイムソンは、この時期の帝国において、一八八四年のベルリン会議以降急速に西洋諸国の帝国主義的政策が推し進められた結果、本国と植民地または社会と個人を一つの全体として把握し表象することが著しく困難な事態に突入していたと論じている(155-156)。他方、たとえば、グリーンは、冒頭で確認したように、ロビンソネイドの系譜をたどりながら、帝国主義的なロビンソネイドの不可能性が、ロビンソネイドがファンタジーへと変容した『ピーター・パン』には現れていると述べる(153-154)。グリーンは議論をジェイムソンの論意から発展的に拡張すると、『ピーター・パン』というファンタジーは、実のところ、金融資本主義的で、植民地を実際の基盤としない新しい帝国主義の全体性を表象する、あるいは、その(リアリストな)表象の不可能性を表象する、同時代の「モダニズム」と本質的には同じ構造を持つ物語として理解される。ジェイムソンがE・M・フォースターの『ハワード・エンド』(一九一〇)に、植民地の表象の失敗を見、その小説におけるイギリス国内に植民地が入れ子のように書き込まれようとするこのなかにモダニズムの誕生を見たのと正しく同じ構造で、ネヴァーランドは、(もはや表象不可能な)植民地として空想上の島なのであり、この空想上の島は同時に、イギリス

国内を入れ子のように含んでいるのである。逆に言えば、ネヴァーランドはイギリス国内と地続きだからこそ空想上の島としてしか描かれえず、この奇妙な関係こそが、ジェイムソンがモダニズム誕生の原因とする、新しい帝国主義における植民地と本国の密接な（金融的な）関係の表象不可能性を比喩的に提示しているのだ。ジェイムソンがモダニズムを新たな帝国主義の文学と言うとき、それはエドワード朝期のことを言っていたのであり、H・R・ハガードやJ・R・キプリングらの書き記した帝国（冒険）物語はモダニズム文学ではないと論ずるジェイムソンの論考は、グリーンが述べる『ピーター・パン』はロビンソンネイドにおけるリアリズムの終焉であることと、実に一致する。

このように、ピーターの仲間たちの振る舞いは、凶らずもエドワード朝期における帝国主義の変容、つまり新たなリベラリズムの誕生によるヴィクトリア朝的拡張主義の終焉そして新しい金融資本主義的帝国主義の出現と密接に連動している。ここまで論じてきたことは、エドワード朝期に、イギリス帝国主義が終わったという議論ではないし、あるいは、現実には、イギリス帝国主義が退潮期に入ったということでもないかもしれない。イギリス帝国主義が退潮期に入るのは第二次世界大戦後という意見もあるだろう。だが、少なくとも言説と文化的想像力

のレベルにおいて、われわれが見てきた作品群には、イギリス帝国主義の変容と植民地主義の終焉の兆しが現れていたのは確かである。

6

本稿は、『ピーター・パン』に登場する少年たちの行動／生活様式を通して、エドワード朝期に起きたロビンソンネイドの変容を、五〇代アメリカの文化状況を間接的・補足的に考慮に入れながら、考察した。グリーンが述べたように、一九〇〇年以降、個性を失い、嘲笑の対象になったロビンソンネイドは『ピーター・パン』において終焉し、空想化された。また、ポイドが指摘したように、帝国冒険物語の舞台は、未開の孤島からポリア戦争を契機に衰退という危機的状况に陥っていた孤立無援の島国である英国へと、その中心を変化させた。しかし、それらは、凶らずもこの時期におけるモダニズムの出現の原理と密接に関係していた。それは、ジェイムソンが『ハワーズ・エンド』に見たモダニズム構造のように、ネヴァーランドが国内／植民地の入れ子構造になっていることに示されていた。すなわち、本稿が論じたことは、(1)『ハワーズ・エンド』と『ピーター・パン』の構造の相同性の指摘、(2)ジェイムソンのそ

の指摘をより具体的に、「帝国の衰退」言説の出現とニューリベラリズム言説の誕生に位置づけたこと、(3) ジェイムソンの指摘をよりはっきりとさせて、植民地主義型帝国主義から金融資本型帝国主義への変容というパラダイムにきっちり載せたこと、にあったのである。

ここに、われわれは、「ニュー」リベラリズムが——「冷戦」リベラリズムを経由して——現在の「ネオ」リベラリズムを用意したことを把握するに至るであろう。すなわち、ピーターの自由な行動、それは、現在へと至るリベラルなアイデンティティの主体を準備したということ。ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリやマイケル・ハートとアントニオ・ネグリが提

示する文化革命の理論、または、社会の慣習に囚われない自由な個人による自己実現の物語は、『キャスト・アウェイ』（映画二〇〇〇）や『ライフ・オブ・バイ』（小説二〇〇一、映画二〇一二）などにおいて描かれ、また、歌手のマイケル・ジャクソン（一九五八―二〇〇九）やエルトン・ジョン（一九四七―）の生／性の様式として紡がれている。このような系譜の出发点に、『ピーター・パン』は存在していよう。

* 本稿は二〇一一年一月五日日本英文学会関東支部第五回大会（於慶応義塾大学）で口頭発表したものに加筆・修正を加えたものである。

註

(1) モダニズム／帝国主義の時代におけるロビンソンネイドについては、『三浦の論考』ロビンソンネイドの性の歴史」をも参照のこと。三浦は、ロビンソンネイドとウェンダー／セクシュアリティとの関係について、Arthur Ransome の *Swallows and Amazons* を中心に論じている。

(2) 本稿では、一九一一年に出版された小説版の *Peter and Wendy* を主要テキストとして用いることにする。

(3) Boerner は *Scouting for Boys* には *Peter Pan* の要素が多分に含まれていることを指摘している (xxx-xxxii)。*Sisson* もまた *Peter Pan* の少年たちとボーイスカウト運動との関連を

示している (119-23)。

(4) ボーイスカウトと軍国主義、ひいては帝国主義との関係を論じているものとしては、Rosenthal, Springhall が挙げられる。

(5) Lloyd George による連立構想については、Scally, Powell を参照のこと。

(6) エドワード朝期英国の初等教育におけるアス

レディンズムとしてのサッカーの重要性に關しては、Richardsの著書、ManganとHickeyの共著による論稿を参照。

- (7) 当時の英国において近代化による都市の荒廢と英国人の退化、特に下層階級の生活様式の墮落という問題意識から生じた田舎生活による心身の再生という言説が、ならに田舎＝植民地、すなわち英国がその植民地と連続していらつて言説をも出現させたことについて、Greenslade Wienerを参照。

- (8) 本稿第四節「五〇年代アメリカ文化に於いての議論」は、Muraの論考にその多くを拠つてらる。

- (9) このリストは「ダイヤモンド版 Treasure Island

- (1950) を付け加えることができるのを、こゝで示しておきたい。この作品における「マンチ・ヒーロー」としての海賊ジョン・シムパーの重要性と、その描かれ方、特に「物語のおわりの場面における(更なる)大海洋へ」と向かう彼の「放浪」の意義は、冷戦リスラリズムなくして語れなかつてであらう。(このおわりの場面構成は Peter Pan ならびに Shame の場合と非常によく似てらる。)
- (10) モタニズムの制度化にまつては Jameson (*A Singular Modernity*), Sinfield, 及び大田越智をも参照しよう。
- (11) 五〇年代アメリカにおける Peter Pan が公開されたらつて、そのみならず、たとへば

主人公ピーターの存在価値と想像上の島ネヴァーランドのそれを、それそれ R. W. B. Lewis の *The American Adam* (1955) や H. N. Smith の *Virgin Land* (1950) との關係を考察するに有益であるであらう。また、Ian Watt の *The Rise of the Novel* が一九五七年に出版され、そこをイギリス小説の起源としてついで Defoe の *Robinson Crusoe* が挙げられてゐるのを冷戦期の産物として捉えることも非常に重要であらう。これらのことについては、本稿で論じていることがあつたため、指摘するにとどめて置く。

引用文献

Bacevich, Andrew J. *American Empire: The Realities and Consequences of U.S. Diplomacy*. Cambridge, Mass: Harvard UP, 2002.

Baden-Powell, Robert. *Scouting for Boys: A Handbook for Instruction in Good Citizenship*. 1908. Ed. Elleke Boehmer. Oxford: Oxford UP, 2005.

Barrie, J. M. *Peter and Wendy*. 1911. *Peter Pan in Kensington Gardens and Peter and Wendy*. Ed. Peter Hollindale. Oxford: Oxford UP, 1991.

67-226.

Bell, Daniel. *The End of Ideology: On the Exhaustion of Political Ideas in the Fifties*. 1960. Cambridge, Mass: Harvard UP, 2000.

Boehmer, Elleke. Introduction. *Scouting for Boys: A Handbook for Instruction in Good Citizenship*. By Robert Baden-Powell. Oxford: Oxford UP, 2005. xi-xxxix.

Boyd, Kelly. *Manliness and the Boys' Story Paper*

in Britain: A Cultural History, 1855-1940. New York: Macmillan, 2003.

Dickstein, Morris. *Leopards in the Temple: The Transformation of American Fiction 1945-1970*. Cambridge, Mass: Harvard UP, 2002.

Eliot, T. S. *Four Quartets*. London: Faber, 1944.

Friedler, Leslie A. *An End to Innocence: Essays on Culture and Politics*. Boston: Beacon, 1955.

Foster, John Bellamy. *Naked Imperialism: The*

- U.S. Pursuit of Global Dominance*. New York: Monthly Review Press, 2006.
- Green, Martin. *The Robinson Crusoe Story*. Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 1990.
- Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel: 1880-1940*. Cambridge: Cambridge UP, 1994.
- Grey, Vivian [Elliot E. Mills]. *The Decline and Fall of the British Empire*. 1905. Oxford: Alden, 1906.
- Grey, Vivian [Elliot E. Mills], and Edward S. Tylce. *Boy and Girl: Should They Be Educated Together?* London: Simpkin, 1906.
- Grigg, John. *Lloyd George: The People's Champion 1902-1911*. Berkeley: U of California P, 1978.
- Hobson, J. A. *The Crisis of Liberalism: New Issues of Democracy*. 1909. Ed. P. F. Clarke. Brighton: Harvester, 1974.
- . *Imperialism: A Study*. 1902. Cambridge: Cambridge UP, 2010.
- Hyan, Ronald. "The British Empire in the Edwardian Era." *The Twentieth Century*. Ed. Judith M. Brown and Wm. Roger Louis. Oxford: Oxford UP, 1999. 47-63. Vol.4 of *The Oxford History of the British Empire*. 5 vols. 1998-1999.
- Jamson, Fredric. "Modernism and Imperialism." *The Modernist Papers*. London: Verso, 2007. 152-69.
- . *A Singular Modernity: Essay on the Ontology of the Present*. London: Verso, 2002.
- Lenin, V. I. *Imperialism: The Highest Stage of Capitalism*. 1917. New York: International Publishers, 2008.
- Maggioli, Harry. *Imperialism: From the Colonial Age to the Present*. New York: Monthly Review Press, 1978.
- Mangan, J. A. and Cohn Hickey. "English Elementary Education Revisited and Revised: Drill and Athleticism in Tandem." *A Sport-Loving Society: Victorian and Edwardian Middle-Class England at Play*. Ed. J. A. Mangan. London: Routledge, 2006. 65-89.
- Mészáros, István. *Socialism or Barbarism: From the "American Century" to the Crossroads*. New York: Monthly Review Press, 2001.
- M[Line], A. A. "The Secret History of the Conference." *Punch, or the London Charivari*. Vol. CXXXIX. London: Whitefriars, 1910. 348-349.
- Mitura, Reicha. "Empire of Liberalism: Cultural War on the Social under Cold-War Liberalism and Neoliberalism." Diss. U of Illinois at Chicago, 2013.
- Pearson, Geoffrey. *Hooligan: A History of Respectable Fears*. London: Macmillan, 1983.
- Peter Pan*. Dir. Hamilton Luske. Clyde Geronimi. Wilfred Jackson. RKO, 1953.
- Powell David. *The Edwardian Crisis: Britain 1901-14*. London: Macmillan, 1996.
- Richards, Jaffey. *Happiest Days: The Public Schools in English Fiction*. Manchester: Manchester UP, 1988.
- Rosenthal, Michael. *The Character Factory: Baden-Powell and the Origins of the Boy Scout Movement*. New York: Partheon, 1986.
- Scally, Robert J. *The Origins of the Lloyd George Coalition: The Politics of Social-Imperialism, 1900-1918*. Princeton: Princeton UP, 1975.
- Searle, G. R. *The Quest for National Efficiency: A Study in British Politics and Political Thought, 1899-1914*. London: Ashfield, 1990.
- Semmel, Bernard. *Imperialism and Social Reform: English Social-Imperial Thought 1895-1914*. London: George Allen, 1960.
- Sinfield, Alan. *Literature, Politics and Culture in Postwar Britain*. 1997. London: Continuum, 2004.
- Sisson, Elaine. *Pearse's Patriots: St Enda's and the Cult of Boyhood*. Cork: Cork UP, 2004.
- Springhall, John O. "Baden-Powell and the Scout Movement before 1920: Citizen-Training of Soldiers of the Future?" *English Historical Review* 102 (1987): 934-42.
- Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society*. 1950. New York: New York Review Book, 2008.
- Wiener, Martin J. *English Culture and the Decline of the Industrial Spirit 1850-1980*. London: Penguin, 1992.
- Zipes, Jack. "Negating History and Male Fantasies

through Psychoanalytic Criticism: "Children's
Literature, 18 (1990): 141-43.

大田信良「批評理論の制度化についての覚書——
トランスアトランティックな文学・文化研究の
ために」『言語社会』第四号(二〇一〇)……一八

一—二二二。

越智博美『モダニズムの南部的瞬間——アメリカ

南部詩人と冷戦』研究社、二〇一二年。

三浦玲一「ロビンソネイドの性の歴史」『ポストモ

ダニズム以降の観点による児童文学におけるセ

クシュアリティの研究』(平成一五年度〜平成一
六年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(1)) 研究
成果報告書 二〇〇五年、七六―九八。